

前田圭介 「Do It Yourself」 垣内光司／八百光設計部 (本誌1106)

建築家と建主との新たな関係性

先月のエッセイで少しふれた「Do It Yourself」(本誌1106)が気になり京都を訪ねた。

DIYという行為に対し、建築家としてどのような促し方をしたのだろうか？ 8カ月に及ぶ気の遠くなるような施工プロセスを経て、建主は何を感じたのだろうか？ 建築家と建主との詳細な相互関係についての話を聞いてみたいと思ったからである。

梅雨の中休みとは思えないほど、真夏並みの暑さと湿度の高い京都らしい日に垣内さんに案内していただいた。

大通りから少し入った幅員6.5m程のトオリを挟んで、新たな3階建ての住宅群の中にポツリと「Do It Yourself」は佇んでいた。その町屋の身体的スケール感は昔日の軒を連ねた町屋風景の面影を想像させる。一方、周辺の住宅群に対して、何かアイロニカルな態度表明に見えるぐらい町屋の風景が変わったことを暗に伝えているようにも感じた。

今回、建主が改修をしたいという要望やコスト

に対して、建築家は一般的な手段では到底無理と判断。そこでDIYという手段を提案し、建主の覚悟や精神的な基礎体力があるかを見きわめたうえで、的確なトレーニングを建築家が指導していることが、何よりも痛快である。それは改修する必要性の有無から始まる。建築家は「清掃して住めば都だから改修の必要はない」といい、まずは1カ月の大清掃を指導する。その清掃を経て何がしたいのかを建主は見出す。「住むための補強がしたい」。そこから、2カ月に及ぶ解体工事の準備トレーニングを経て明確な意思と基礎体力を養っていくのだが、目的地を目指す建築家と建主の姿は、さながら選手とコーチのようである。たとえば、解体して柱がない状況に落ち込む建主に「こんなことでビビるな、想定内や」と建築家は喝破し、解体で出た金属類はスクラップにもっていって、資金に還元し、金属の値踏みができる健全なスキルを身に付けさせる。はたまた手練りコンクリート

を打設した経験から、打設途中に建主が現場を去る姿に「どこいくねん！」の建築家の言葉に、建主は落ち着いて「ちょっとそこまでコンクリート買いに」と期待以上の成長ぶりを発揮したり、建主自らが問題を解決する力を身に付けていったことを語ってくれた。モチベーション・観察・各工程ごとのテーマ・信頼関係・考える力など、まさに人を育成するコーチングである。そして建築家としてのスキルコーチングの的確さと、受け入れる建主との真摯な信頼関係が作品に結実しているように感じた。「デザインの精度を求めるのではなく、建主の精一杯の精度をデザインをした」という垣内さんの立ち位置は、予定調和ではない他者性ゆえの着地点を目指し、また楽しんで見えた。それは建築家自身の



2階部屋にて。天井にはポリエステル製の布地がドレープ状に設えられている。左から建主さん、前田さん、垣内さん。

写真提供／八百光設計部

強度があるからこそ、そこに他者が入ることで、期待を越える空間につながっていることを「Do It Yourself」は証明している。建築家としての新たな職能の発揮の仕方にとでも共感した。祖父から受け継いだ町屋と向き合った長い時間は、建主に住むことの意味や自覚をもたせ、将来「時間」という名のバトンを子供に渡す姿に満ち溢れていた。(まえだ・けいすけ/建築家)



東側外観を見るおふたり。もとの建物は築100年の町家。



木工用ボンド水を吹付けた土壁のテクスチャーを確かめる前田さんと垣内さん。それを台所から見守る建主さん。